

平成 30 年 9 月 1 日現在

機関番号：32601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580112

研究課題名(和文) 英語の初期学習者における内容重視活動—小中を繋ぐCLIL活動

研究課題名(英文) Content Language Integrated Learning for EFL learners at early stages -
Coordination between primary and secondary schools

研究代表者

アレン・玉井 光江 (Allen-Tamai, Mitsue)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：50188413

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は小・中学生を対象に、昨今ヨーロッパおよびアジアで注目を浴びている内容を重視した英語教育法に基づくプログラムを開発し、それを公立小・中学校で実践し、効果について検証することを目的としている。週1回の公立小学校の授業で内容重視の活動を行うためには児童がある程度の英語力、特にリタラシーを持つことが条件となる。彼らの英語力を向上させながら実践可能な内容重視の活動を開発し、実践した。その成果は報告書にまとめている。また中学校では、科学的な読み物を読ませることから生徒の英語力の向上にどのような影響を与えるのかを探った。成果はあったもののこちらは継続して研究していく必要がある。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop a program based on Content Language Integrated Learning (CLIL) for English language learners at primary and secondary levels. The researcher has drawn up CLIL lesson plans and actually used them at elementary classes to examine the effectiveness of the program; for example, she used the idea of line and point symmetry to review letters. She found that students are required to obtain a certain English proficiency, especially literacy skills, in order to appreciate CLIL lessons. Although the practice was limited, due to the short length of English classes at primary schools, one 45-minute class per week, the students were found to show positive reactions towards CLIL.

As for the junior high school students, she developed science content oriented reading materials to use English as academic tool. The students found it interesting to connect science knowledge and English and the English teacher communicated with a science teacher through the reading materials.

研究分野：小学校英語教育

キーワード：CLIL活動 小学校英語 小中連携 Storytelling 活動中心の英語教育

1. 研究開始当初の背景

研究開始前年度(2013年12月13日)、文部科学省は『グローバル化に対応した英語教育改革』を発表し、小学校高学年の外国語科と中学年への外国語活動導入計画を発表した。しかし教科としての目標、教科内容、シラバス、教員研修と養成、教科書、評価、小中連携、等々多くの問題が山積していた。

2. 研究の目的

本研究は、公立小学校で行うのにふさわしい英語教育を求め、昨今ヨーロッパ、アジアで実施され注目を浴びている内容を重視した英語教育法に基づくプログラムを開発し、それを実際の公立小学校で実践し、効果について量的、質的に研究することを目的としている。

言語を習得するためには「意味のある文脈(meaningful context)」の中での言語との接触が不可欠であり、それが無いところでは本当の言語学習は成り立たない。子どもを対象とした第二言語教育における意味のある文脈の大切さについては、Whole Language Approach(Goodman, 2005, Freeman & Freeman, 1992)や Activity-Based Approach(Vale & Feunteun, 1995)などで繰り返し述べられているが、中でも内容を重視した教授法である Content-Based Approach(Brinton, Snow & Wesche, 1989)および Content and Language Integrated Learning (これ以降 CLIL, Coyle, Hood & Marsh, 2010)では、その重要性が指摘されている。内容に対する知識 (content) を高め、同時に言語能力(communication)を育て、彼らの思考能力(cognition)を高め、そして異文化理解力(community/culture)を高めることができるとされる CLIL 指導を公立の小学校で実践し、適切な活動として調整していく過程を研究することは、教科化を考える時だからこそ非常に重要なことであると考えた。

3. 研究の方法

まずは、内容を中心にした教授法である CLIL と CBA 理論について文献研究を通して理解を更に深めた。発祥の地であるヨーロッパ、そしてアジア諸国での実践をしっかりと検証し、CLIL の指導理論の中核となる Content, Cognition, Communication, Community/Culture がどのように授業プランに反映されているのかを吟味した。次に導入する語彙、表現、文法項目などを考慮し、日本人の児童が興味・関心を抱くテーマに合わせて活動を考案し、開発した活動を公立小学校に通う5、6年生を対象に実践した。実践の前後にテストやアンケートを実施し、参加者の言語的な伸びや情意の変化などを検証した。

4. 研究成果

(1) CLIL の特徴

Dalton-Puffer (2011) はヨーロッパ、南アメリカ、そして多くのアジア地域で実践されている典型的な CLIL クラスの特徴を次のようにまとめている： 授業担当者が科目を教える教員であること、CLIL の授業は教科として時間割に組んであり、外国語の授業は科目として別に時間が確保され外国語専門教員によって教えられていること、また CLIL は学習者が第一言語のリタラシー能力を獲得した後に始めること。更に CLIL では「translanguaging」という用語で表現されるが、体系的、計画的に学習者の第一言語と外国語を授業中に使用する(Coyle et al. p.16)。これは外国語の習得、教科内容の理解、また認知の発達を促すために行われることで、例えば第一言語で書かれた教材を使って宿題をすることなどで、学習者は内容を十分に理解でき、自信をつけることができる。

CLIL が目指す外国語教育の目的は、新しい学習指導要領で示された「育成すべき資質・能力」に呼応するものである。教科内容を加えた英語教育により、児童は使う英語を実感し、知的に刺激を受け、思考力、判断力を伸

ばしていくと考えられる。外国語学習を通して問題を個人またはクラスメイトと協同で解決していく方法を見つけていく過程で学びに向かう態度を育成していくと予想される。しかし、具体的に小学校高学年の外国語科の中で Dalton-Puffer が定義するような CLIL 授業を展開することは難しい。

(2) 公立小学校高学年を対象とした外国語科での CLIL の可能性

公立小学校では今まで週1回という授業回数および1クラス30名以上という大クラスで授業が行われることが多い。効果的な外国語教育を進めるにはとても厳しい環境である。その中で内容重視の活動を展開する場合、当然本来の CLIL とは異なる実践方法を開発する必要がある。著者は内容重視の授業を実践するために次ぎのような原則をたてた(具体的な活動やレッスンプランは別に作成した科研報告書にまとめている)。

英語での内容理解、またメッセージのやり取りを大切に英語のみで活動を行う。

内容説明に使う英語はなるべく児童が理解できる語彙および表現を使用し、意識的に繰り返しを多くする。

英語のみの活動は児童にとって負担になる可能性があるため、5分~8分の集中した活動にする。

背景知識を活性化するために豊富な視覚教材、ワークシートなどを十分に用意する。

どうしても必要な場合は日本語を使用するが、注意し、効果的に使用する。

活動中はなるべく interactive になるように、英語での声かけを豊かに行う。

児童に対して活動の意義付けを行う。

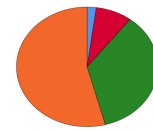
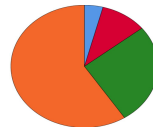
(3) 児童の反応 (アンケート結果)

ここでは5年生を対象として行った6つの CLIL 活動に対する児童の反応を報告する。それぞれ「面白い」と「理解できた」の2つの観点で活動を「とても面白い」から「全然面白くない」また「とても理解できた」から「全然

理解できなかった」を4段階(橙4、緑3、赤2、青1)で評価してもらった。

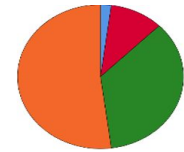
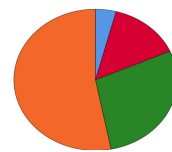
アルファットの太文字を線対象で復習

(ア) 面白い (イ) 理解できた



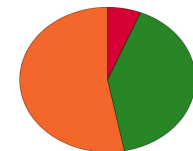
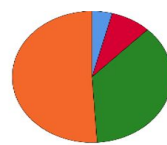
世界の熊の名前や大きさについて

(ア) 面白い (イ) 理解できた



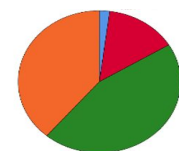
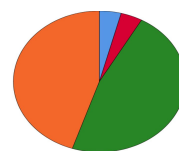
熊が食べるものについて

(ア) 面白い (イ) 理解できた



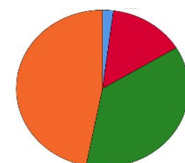
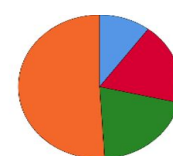
動物の性別について

(ア) 面白い (イ) 理解できた



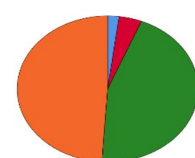
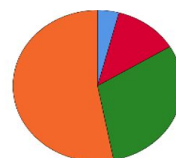
Porridge を作ろう

(ア) 面白い (イ) 理解できた



日本に住む熊について

(ア) 面白い (イ) 理解できた



上のグラフが示すように、全体的には全ての活動を「面白く」また「理解できる」と評価している。また、活動を面白いと思っている

とその理解も高まるようである。児童は線対象の概念からアルファベットの大文字を復習した活動を一番面白いと評価しており、また熊の食べるものに関しての活動が一番理解できたと評価した。次にこれらの活動についての児童の代表的な感想を書きだす。

(線対象のクラス)

* Line Symmetry が楽しかった。

* 世界のアルファベットがどのようになっているのか知れたのでうれしかった。文でいわれるとわからないことがあったけれど単語できいてわかるものもあった。今度は少しでもたくさんの文を理解したいと思った。

* たいしょうを探すのが楽しかった。

(熊の食べ物クラス)

* くまがアザラシも食べることを知りびっくりしました。知らないことも英語で知ったので勉強になりました。

* 熊は魚や実を食べるのはしっていたけれど、蜂蜜やアザラシをまで食べてしまうということを知りました。

* くまの食べるものがわかってよかったし、こくばんにたんごをかいてあとからにほんごをかいてくれてたのですごく楽しくできたしおもしろかったし、わかりやすかったです。

さらに学期末に行ったアンケートでは経験した CLIL 活動を全体として4つの項目にそれぞれ5件法で回答してもらった。表1が示すように、5年生の評価のほうが全体的に高い傾向であった。授業中はそれなりの速さで英語を話していたので、補助教材を用意していたとしても決して簡単な活動ではなかった。それにもかかわらず児童は、活動を「楽しく」感じ、「興味を持ち」、「集中して」取り組んだことがアンケート結果からわかった。

表1 内容重視の授業に対する児童の反応 (5件法による)

	5年	6年
楽しい	4.55	3.89
興味ある	4.73	3.89
集中できる	4.32	4
簡単	2.73	2.79

(4) 担任教員の反応

このような内容重視の授業形態に関して、担任教員は次のような感想を持った。

「なんで、アレン先生のクリルが面白いの？」と訊ねたら、「日本語でもわからないようなことを英語で教えてもらえるから」とか、「新しいことを教えてもらえるのは楽しいから」というのが意見でした。英語はわからないと思いますが、とにかく頑張れる子どもたちで、「なんとなくわかる」と言います。何をもってそのように言うのか、変な自信が面白いです。

(5) 英語専科の反応

本研究には4名の研究協力者がおり、彼女たちは公立小学校で英語の専科教員として担任教員とチームティーチングを行っている。彼女たちは CLIL 活動の有用性を認め、研究に参加した。ここに彼女たちが体験した CLIL 活動から得られた知見を紹介する。(彼女たちの活動およびレクシンプランも報告書に載せている)。

きびを含む穀物をテーマの6年の活動

「児童らは、団子を作る経験がこれまでないため、調理法に強い興味を示した。本活動を行う前の週に予告をしていたら、授業が始まる前から、ある男子児童は、「先生！今日はきびだんごの作り方を教えてくれるんでしょ？」と声をかけてくるほどであった。その強い興味が児童の中にあつたため、基本的にすべて英語で展開しても、児童らは、トピックに焦点を当てて活動に熱中できていた。」

目に焦点を当て、森に住む肉食動物と草食

動物に分類し、両者を比較した5年の活動。
「生き物に興味のある児童が、普段の英語では見せない積極性を見せたのが印象的だった。今回の活動は、説明が比較的多くなってしまったが、その説明を聞ききるためにも、いくつかの英単語を意図的に教えた。その言葉が共有されることで、難しく長い説明でも、児童らは負荷を感じることなく英語を聞き、理解しようとしていた。この活動の経験を通し、日本のようなEFL環境の児童には、ある程度の主要語彙を指導したうえでCLIL活動を行った方が効果的なこともあるのではないかと考えるようになった。」

理科の学習単元「天気と気温」、また算数学習単元「折れ線グラフ」に関連付けた活動。
「“degrees, Celsius”という言葉には馴染みがなかったが、15くらいまでの数字や時刻は聞き取ることができるので、容易に表を埋めることができた。折れ線グラフは算数の授業で学習したばかりのタイミングだったので、表からグラフへおこす作業もほとんどの児童ができた。答え合わせを黒板上のスクリーンで専用のタッチペンで記入できる方法にしたため、前に出て書きたい子が多かった。」

動物の大きさがテーマの3年の活動
「足跡のクイズでは実物大の動物の足あとと人間の足あとと比較しつつ、足の大きさや形から動物を推測していた。また、最後のぞうの足あとでは実物大の大きさに驚いていた。」

(5) まとめ

以上のように研究協力者の実践からも公立小学校で行うCLIL活動は児童の英語学習に対する動機を強め、深い学びにつながっていくことがわかった。研究者自身の体験、アンケートから見られる児童の反応からも内容重視の授業は大変興味深い。しかし同時に活動のテーマを決め、それに合わせてLESSプランを作成するのは簡単ではなく、更に教材作りには多くの時間がかかる。ま

た何よりも児童の基礎的な英語力を向上させなければ活動がうまくいかないことをたびたび経験し、英語力を確実に伸ばし、定着させなければ効果的なCLIL活動は実施できないことがわかった。

本研究よりCLIL授業の大きな可能性を認めるとともに、充実したCLIL活動を進めるためには児童の英語力の向上、とくにリーディング能力の向上、さらに先生同士の活動や教材の共有を進めることが大切だと考える。

参考文献

- Brinton, D., Snow, M. A., & Wesche, M. (1989). *Content-based second language instruction*. New York: Newbury House.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *Content and language integrated Learning*.
- Dalton-Puffer, C. (2011). Content and language integrated learning: From practice to principles? *Annual Review of Applied Linguistics*, 31, 182-204
- Dalton-Puffer, C., Llinares, A., Lorenzo, F., & Nikula, T. (2014). You can stand under my umbrella: Immersion, CLIL and bilingual education. A response to Cenoz, Genesee & Gorter. *Applied Linguistics*, 35, 213-218.

5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

アレン玉井光江、小林悠、松永結実、「効果的な小学校英語の指導方法を求めて 日本人の英語専科教員の役割ー」、『*英文学思潮*』、査読無、90巻、2017、1-17

アレン玉井光江、「内容を重視した外国語教授法 CBIとCLIL-」、『*ARCLE REVIEW*』、査読有、10巻、2015、53-65

〔学会発表〕(計4件)

Mitsue Allen-Tamai, The role of oral language in literacy development among

young EFL learners, JACET 56th International Convention (2017.8.30)

Mitsue Allen-Tamai, Yumi Matsunaga, A holistic approach to teaching English to young EFL learners through stories, JALT2017 International Conference, (2017, 11, 18)

Mitsue Allen-Tamai, A two-year study to investigate literacy development among young EFL learners, International Conference of Society for the Scientific Study of Reading, (2016.7.17)

Mitsue Allen-Tamai, Emiko Izumi, Evaluation of Primary School English Language Activities in Japan: To Develop Pupils' Self-Efficacy and Autonomy, Foreign Language Education and Technology VI, (2015. 8.13)

〔図書〕(計3件)

Copland, F & Garton, S (編), tesol press, *TESOL VOICES Young Learner Education*, (2018), 146 ページの7章 Mitsue Allen-Tamai 「Learning English From Fairy Tales: A Story-Based Curriculum for EFL Learners」 pp.59-66

アレン玉井光江 (監修), (2017), 『きいて！うたって！おぼえよう！えいごのうた』, 東京：主婦の友社 (52 ページ)

篠原清昭 (編) ミネルヴァ書房、『新・教職リニューアルー教師力を高める』、(2016) 217 ページの14章 アレン玉井光江 「小学校における英語教育」 pp.169-179

6. 研究組織

(1) 研究代表者

アレン玉井光江 (Allen Tamai, Mitsue)
青山学院大学・文学部教授
研究者番号：50188413